



TITLE:

臺灣日蝕紀行(3)

AUTHOR(S):

井本, 進

CITATION:

井本, 進. 臺灣日蝕紀行(3). 天界 1942, 22(250): 124-127

ISSUE DATE:

1942-03-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168355>

RIGHT:

臺灣日蝕紀行 (3)

Trip for Formosa Eclipse

井 本 進 *Susumu Imoto*

九月21日 (日)

愈々待望の日蝕當日となつた。天気はよい方だ。たゞ亂雲のたゞすまひが氣になる。朝食を前庭にて済ませての後、總督府の和泉氏により寫眞撮影が行はれた。さあこれからが觀測の準備である。

觀測場所は前日下檢分した燈臺南方の海岸寄りの窪地である。之れは風があたらないし、又餘り人が立入れない場所を山本博士が選定されたものである。筆者携帯の5厘屈折寫眞望遠鏡とカメラなど、機械を取揃へて、据付けに行く。昨夜燈臺長に御依頼して雇つた臺灣人2名が來たので、機械を固定する爲め土を掘らせる。次第に此の窪地には望遠鏡の砲列が敷かれ、又我々の直ぐ横に日本ニュース映畫班の寫眞部隊が陣取つた。その横に臺北放送局のラヂオ班が陣取り、マイクローフンを据え、現地放送をやるのである。此處十數人の觀測者の間に混つて3,4人の婦人の姿も見受けられる。筆者は何度も此の觀測場所と官舎との間を忙しく往復する。今日の日蝕を、いち早く報導せんものと新聞記者團が詰め掛けて來る。今日の天氣を人から時々尋ねられるので、其度毎に、『大丈夫でせう』を繰返した。

山本博士は參謀本部の地圖により觀測地點のポデション(位置)を算出され、日蝕經過時間を左の通り發表された。

初虧 (第一觸)	12h 10m 24s
食既 (第二觸)	13h 41m 5s
生光 (第三觸)	13h 43m 20s
復圓 (第四觸)	15h 9m 0s

夫れを紙に書いて一般に揭示する。

此の機會に富貴角燈臺のポデションを記して置かう。

25°18'1"N, 121°31'8"E.

此の燈臺は明治30年に設置されたもので霧信號をなし、光力等級 II, 55000 燭光である。

一方山本博士は宿舍で今日の日蝕觀測の時刻を報ずる時計係の訓練に當られた。クロノメータの読み方である。此の大切な役に當つたのは臺北一中5年生の小林幸男、渡邊剛兩君であつた。兩人とも如才なく、直ぐに要領を呑み込んだ。山本博士の觀測機械は7.5厘屈折赤道儀で接觸(コンタクト)時刻の測定

をせられるのであつた。観測地點の直ぐ東側に、天幕の下、机の上にクロノメータを置き、時刻を數へる爲め、兩君は着席した。第1觸の時刻測定の豫行演習を1回やつた。

空には雲が大分かぶつて居たが、次第に晴れて來て、第1觸の12時頃は一面青空の好天氣となつた。居合すもの一同快哉を叫んだ。

間もなく第1觸である。山本博士の用意の合圖が聞える。次いで「始め！」の合圖により時計係は「1,2,3,4……58,59,60」「1,2,3,4……58,59,60」と云ふ風に時計の刻みに従つて數へた。遂に來た。記念すべき昭和16年九月21日の皆既日蝕が始まるのである。肇國以來、未曾有の聖戰遂行中の大東亞の空を、西より東へ貫いて起る空の歴史的展開なのである。一同靜かに望遠鏡にかじりつくが如く、アイピース（接眼鏡）を通して蝕の初まりを注視した。肉眼で見た處を云へば先づ右肩上から虧け初める。次に、山本博士の“終り！”の合圖が發せられた。第1觸は終つたのである。

次第に風が東より吹いて來て、空一面不愉快な雲に閉ざされて來た。雨さへパラマタしたが、又太陽が出て來た。太陽は刻一刻と月に蝕ばまれて行き、遂には黒い太陽と變貌するのである。自分は小型映畫で時々観測の狀況と蝕の有様を撮影した。再び雲は虧け行く太陽を隠して終ふ。午後1時30分には臺北放送局より特に日蝕の爲め臨時の時報が發せられることになつて居た。然し今となつては誰も時刻を合せようとするものもなく、一同たゞ空の太陽を凝視して居るのみである。やがて臺北放送局の現地放送が始まる。アナウンサが今日の観測狀況をマイクロフォンの前に立つて話し初めた。映畫班のクラックの音が聞える。皆既が近づくのに空の雲は益々増加して來る一方で、遂には太陽が全く見えぬまでに蔽つてしまつた。何とも出來ない。たゞ西の方は晴れて居た。遙か海岸には寄せ來る波が岩に當つて白く碎けるのが見えた。少し一段下方の空地には白い大きい紙が擴げられ、シャドウ・バンド（影の帶）を捕捉せんものと用意されて居るが、天氣が悪いのでどうも無駄となる様だ。

愈々切迫して來たが、雲は空一面に擴がつて居て急に晴れさうもないのだ。態々臺灣まで遠征して來た方々の失望を思ふと自分には我慢出來ない氣の毒な感じが湧き起つた。天空を凝視して居られる山本博士に聲をかけて『これでは愈々北海道へ行くのですね』と云つた。山本博士は笑つてうなづかれたのみ。北海道で見える皆既日蝕は來る昭和十八年二月5日早朝起るのだが、今は此の回目の日蝕を期待するより途がない。

やがて午後1時41分！山本博士の『用意』の號令が發せられた。次いで「ゴ1」の聲。時計係は又「1,2,3,4……」を読み上げて行く。今度は60秒毎に繰返へさず一氣に皆既繼續時間を含む130秒を續けて讀むのである。

今まで明るかつた空は急に暗くなり始めた。食既である。雲が黒い太陽の上を走つて居る。時々チラと黒い太陽の全貌が見えて来る。まあよい。絶望かと思つて居たが少しは見られるらしいとの希望が起つて來た。一同は物に憑かれたかの様に黒い太陽を凝視して居る。望遠鏡で見るもの、双眼鏡で覗くもの、肉眼で眺めるものなど、様々である。幸運にも、コロナが見えて来るではないか!! 全く、クリームのかゝつた眞珠色である。又となく美しい色の輝きである。プロミネンスが赤く見える。再び黒い太陽は雲に隠れた。遂に筆者はこれだけ雲が多くては寫眞をとつても無駄であるとあきらめ、只、眼で、双眼鏡を通して眺めることとした。何處からともなく、涼氣が身に襲つて来る。

又現れた。何となく凄味を感じる。眞黒い圓盤の周圍には眞珠色の光冠が見えて居る。輝く太陽の今は變り果てた姿だ。誠に畏れ多い話であるが、天照大神が天の岩戸にお隠れになつた時の光景は正しく斯くあつたであらう。薄暗い不気味な「夜」が訪れて來た。再び雲が黒い太陽を隠して終ふ。時刻はドン々経つて行き、130秒ももう直ぐである。全く時は瞬間に過ぎて行く。終に13⁰の数が讀まれて、山本博士の『ゴーン』の聲が微かに聞へた。残念にも雲に隠れた儘であつた。従つてベイリイ・ビーズ (Bailey の珠數) は遂に見ることが出来なかつた。又現れたが右上の邊りから強い光が洩れ出て居る。ダイヤモンド・リング (Diamond の指環) である。視界は次第に明るくなつて行く。直ぐ雲に隠れる。斯うしてアツク無く皆既の瞬間は終了した。併しまああれだけ雲があつて、少しの間でもインナ・コロナ (黒い太陽の外を包む光冠の内側の部分所謂内部コロナ) が見られたことはせめてもの慰めであり、80%位の成功であつたと云ふことが出来よう。皆既が終ると、直ぐ山本博士は近くに用意されたマイクロフォンの前に立たれ、現地放送を始められた。『最初の内は雲が餘りに多いので何うなることかと思つたが、幸ひ雲の合間を通して黒い太陽を繞る美しいあのコロナの壯觀に接し、又眞赤なプロミネンスの發生して居る光景を見ることが出来たのは好都合であつた。寫眞を寫した人も相當あつた様であるが、雲があつた爲め餘り成功は期待することは出来ないであらう。併し大體に於て八分通りの成功を収め得たと云ふことが出来よう』と云ふ様な意味のことを、例の流暢な口調で話された。

これで日蝕皆既のクライマックスは過ぎ去つたのである。

自分は、皆既の直前、午後1時30分に合せたポケット用最高最低寒暖計を足許に置いて居たが、夫れを1時46分に取上げて見た處、此の16分間に2度温度が下つて居るのを知つた。即ち1時30分には華氏85度であつたが、83度まで2度だけ下降して居たのである。

あの歴史的場面は終りを告げたのだ。昭和16年九月21日午後1時43分20秒、

聖戰遂行中の大東亞の空に起つた皆既日蝕を、人々よ銘記せよ。日本人と華人とを除いては外人が殆んど此の觀測に参加することのなかつた日蝕である。漢口は？ アジンコトは？ 石垣島は？ 基隆は結果如何であつたらう？ 皆成功を祈る次第である。大東亞共榮圈の前途に榮あれ！！ 殊に我が天文學界の將來を思ひ、これからの人達の一層の奮起を期待する次第である。

前に話した通り第3觸の生光が雲に妨げられながら、時刻を測定することが出来たのは愉快であつた。次の第4觸の復圓は不満足な結果に終つた。

燈臺下の宿舍に戻ると、朝日新聞記者上野氏が語る處によれば、宿舍前にある百葉箱の寒暖計、氣壓計、濕度計の觀測結果は下記の通りであつたと云ふ。

觀測機械	零時10分觀測	午後1時40分觀測	午後2時觀測
寒 暖 計	攝氏27度4分	攝氏25度4分 (此ノ差2度ナリ)	
氣 壓 計	762耗75	761耗20	
濕 度 計	24度 0	23度 3	23度 4

鹿兒島高等農林の藤瀬教授も30分間に攝氏で2度下つたことを筆者に語られた。大體同様の結果が得られた次第である。午後4時頃、觀測機械を取纏め、再び臺北放送局の自動車に乗り、懷しの富貴角燈臺を後にした。又再び此の燈臺を見るのは何時の日であらう。思へば感慨無量なるものがあつた。日没近く、臺北驛附近の萬屋と云ふ宿に旅装をといた。臺北公會堂の吉村氏に別れを告げる。茲で山本博士と筆者は2泊することとした。又同じく此の宿に來られる筈の藤瀬教授と學生坂上務氏の到着が遅いので、夜遅くまで待つ。山本博士の舊友である臺灣總督府鐵道部運輸兼工作課長の速水和彦氏が態々訪問あり、歡談の後、11時過ぎ頃歸邸さる。

九月22日 (月)

昨日の疲れでグッスリ寝る。朝8時頃起きる。

今日は總督府博物館と例の黃三桂の隕石を見學することとした。午後3時頃より公會堂と臺灣日日新聞社に立寄り、西川、池田兩氏の御案内にて萬華の黃三桂宅を訪れ、隕石を見た。どうも隕石ではなく普通の石らしくあつた。

夜午後9時過から臺北公會堂で日蝕を語る座談會が開催せられ、席上山本博士外數氏の講演と談話があり、盛會裡に10時頃終つた。和泉三思氏次いで蔡章獻君が宿へ訪ねて來られた。(つゞく)